

十勝川治水100年

～治水の歴史と記念事業の取組～

帯広開発建設部 治水課 ○中川 武則
天羽 淳
矢部 健一郎

十勝川の治水事業が始まって100年という節目の年を迎えるにあたり、流域の発展の基礎となった十勝川の治水の歴史を改めて振り返り、治水事業の担った役割を再認識するとともに、十勝川流域のさらなる発展と防災意識の向上にむけて、様々な団体と連携した記念事業を予定している。

この発表では、十勝川治水事業の歴史について報告するとともに、十勝川治水100年記念事業の取組について紹介する。

キーワード：地域活性化、地域交流・連携、防災、広報

1. 十勝川流域の概要

十勝川は、その源を大雪山系の十勝岳(標高2,077m)に発し、山間峡谷を流れて十勝平野に入り、佐幌川、芽室川、美生川、然別川等の多くの支川を合わせて帯広市に入り、音更川、札内川、利別川等を合わせ、豊頃町において太平洋に注ぐ、幹川流路延長156km、流域面積9,010km²の一級河川である。(図-1)

また、河口部には、十勝川本川より河口閉塞対策を目的として浦幌十勝導水路(昭和57年度(1982年)完成)を通じて利水導水をうける浦幌十勝川(かつての十勝川河口)流域も有している。(昭和58年度(1983年)に十勝川水系に編入。)

その流域は、帯広市をはじめとする1市14町2村からなり、流域の関係市町村の人口は、約32万人である。

また、流域には広大な十勝平野が広がり、帯広市周辺では小麦、甜菜、馬鈴薯、小豆、いんげん等の畑作主体の大規模な農業が営まれるとともに、酪農、畜産も盛んであり、それらを加工する食品製造業なども多数存在しており、日本における食糧供給基地となっている。

2. 十勝川の沿革

(1) 十勝川前史

今から数千年前、十勝は本州と同じように古代の人々が生活していたことが吉野遺跡、十勝太遺跡、池田遺跡、十勝川温泉付近、鈴蘭高台、緑ヶ丘高台などの遺跡によって判明している。

時代を下ること明治7年(1874年)に当時の官庁である開拓使に雇われた外国人地質学者らが、十勝川本流を



図-1 十勝川流域図

下り、近代における十勝川と人との関わりが始まった。明治16年(1883年)には北方開拓に大きな使命を感じた伊豆の人である依田勉三が北海道開拓の結社として晩成社を設立し、わずか27名で帯広に入植したのが十勝の開拓の先駆けとなった。

入植当初はイナゴによる食害、天候不順、野火や獣による食害などにより開墾は遅々として進まなかったが、明治25年(1892年)頃になりようやく農作物の収穫が安定し、明治30年(1897年)に社有地の一部を宅地として開放すると、多くの移民が殺到したという。

十勝川流域の肥沃な土地は年毎に注目を浴び、多くの開墾者が入植して河岸の開拓も進んでいったが、明治31年（1898年）には洪水により、死者21名、被害家屋2,544戸、氾濫面積5,989haが被害を受けた。

(2) 治水事業の始まり

十勝川水系の治水事業は、十勝平野への開拓を定着させるため、頻発する洪水への防御と下流部湿地帯の解消により農地や居住可能な土地の創出を目的として進められ、明治31年（1898年）の大洪水を契機として、大正7年に十勝川治水計画大綱が立てられたが、大正11年（1922年）に未曾有の大洪水（写真-1）に遭遇し、計画が改訂された。

この洪水は、伊豆半島から北北東に進み根室付近を通過した台風の豪雨によるもので、降雨量は帯広で213.7mm、死者9名、家屋流出破損240戸、同浸水4,238戸、田畑流出冠水5,243ha、家畜溺死129頭、橋梁の流失損壊240戸、堤防決壊36kmに及ぶものだった。

大正12年（1923年）7月には帯広市内に「十勝川治水事務所」が創設され、開拓の中心である西帯広から茂岩までの治水事業に着手し、十勝川流域の本格的な治水事業が始まった。

(3) 主な治水事業

a) 統内新水路（昭和初期）

十勝川流域の治水事業は、まず当時の開拓の中心であった西帯広から茂岩にかけての改修工事から始まった。

続いて、池田町市街地の低部浸水を防ぐ目的で利別川新水路、利別川の切替工事へと続いた。

また、帯広川、途別川、売買川、猿別川などの支川の切替工事が計画され実施されていったが、昭和初期の治水事業で最大のもは統内新水路掘削工事である。

これは洪水被害の軽減はもちろんのこと、ほとんどが泥炭地だが990haに及ぶ統内原野の開発が目的であり、十勝川中流域の千代田鉄道橋からキムウントー沼を經由し、茂岩までのおよそ15.2kmを掘削し、原始河川そのままに蛇行していた十勝川から新水路へと切り替える工事であった。（図-2）

昭和3年（1928年）に着工された新水路は低水路幅が160~180mで、掘削量はおよそ9百万m³、築堤の盛土はおよそ7百万m³といった工事規模は、北海道内でも屈指の一大事業となった。

当時の技術職員のご苦労が昭和48年刊行の十勝川治水史に寄せられているので一部を抜粋してご紹介する。¹⁾

- ・縦横断測量のため現地に向かう移動手段は自転車による他なく、統内から茂岩まで片道1時間を要した。
- ・現地は泥炭湿地帯で膝まで没するうえ、レバリングの際に荒い呼吸のままだとバブルが狂うといった状態。息を殺して機器のレンズを覗く。
- ・腰を下ろす場所もない湿地のため、昼飯は立ったまま



写真-1 大正11年の大洪水により、一面が湖沼と化した利別地区（上）と北海タイムスの記事

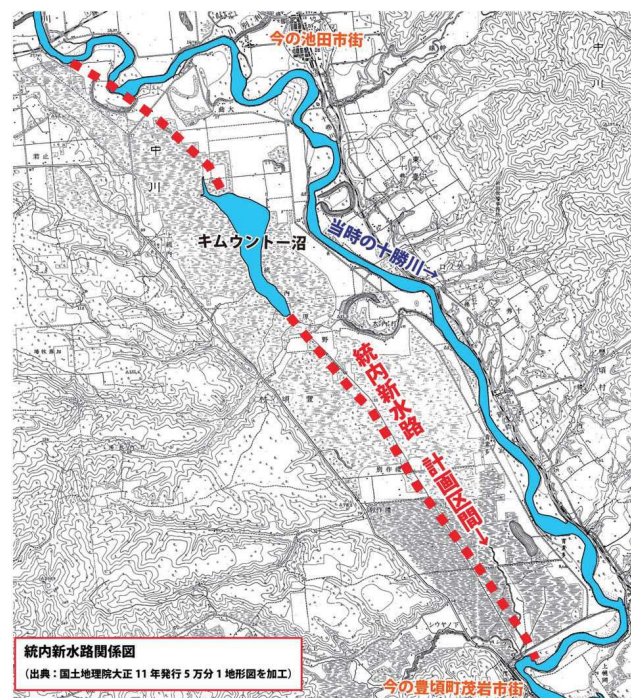


図-2 統内新水路関係図

ま握り飯をパクつく程度。

- ・夏から秋にかけて勤務時間は4~5時から20~21時で休日は月2日だけ。雨の日は貴重で内業時間に当てる。

こうして書いてだけでも想像を絶する困難な状況であるが、ご本人も寄稿文の中で「当時を顧みると日本人は

皆、勤勉であったと今日不思議に思える位のものである。」と回顧しておられる。慮れば本事業に対する当時の開拓民の期待は最大限に高かったものと考えられ、この期待を一身に背負ってこそその働きだったものと思われる。

工事は当初人力掘削と馬による運搬盛土から開始され、利別川の切替工事が終わると、設備一切を移設して42t エキスカベーター（バケットの連続した掘削機）（写真-2）と20t蒸気機関車（写真-3）の機械掘削へと移っていった。

こうして続けられた事業は、開始から9年後の昭和12年（1937年）に通水の瞬間が突然訪れた。

9月12日11時10分に仮締切が洪水により決壊し、歴史的通水の瞬間となった。これは工事完了の3日前だった。（写真-4）

b) 木野引堤²⁾（昭和後期～平成初期）

十勝川の中流部に位置する木野地区は、右岸側に帯広市、左岸側に音更町市街が展開し、十勝地方の主要な都市機能が密集している。また、音更川と札内川の2大支川が合流しているが、十勝大橋付近は川幅が上・下流に比較して極端に狭く大きく湾曲しているため、計画流量 $6,100\text{m}^3/\text{sec}$ に対し、現況流量が $3,100\text{m}^3/\text{sec}$ と流下能力51%ほどであり、洪水を安全に流下させることが難しい状況にあった。（写真-5）

このため左岸側の音更町木野地区の堤防を最大で130m堤内地に造り直す事業が計画され、昭和60年（1985年）に開始された。

この事業に伴い、十勝大橋は橋長が不足するため、平成3年（1991年）に架け替え工事が開始され、平成8年（1991年）に現在の十勝大橋が完成した。

追って平成10年（1998年）3月に木野引堤事業が完了した。

この事業によって新たにできた高水敷は、平常時にはパークゴルフ場や親水公園として多くの住民に親しまれている。



写真-5 木野引堤 空中写真

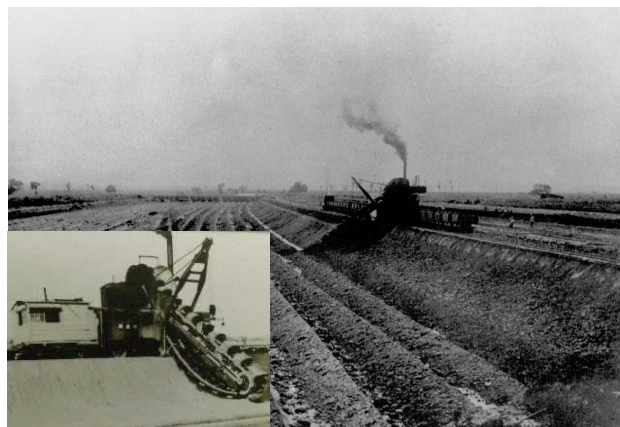


写真-2 エキスカベーターの作業風景と
エキスカベーター詳細写真（左下）

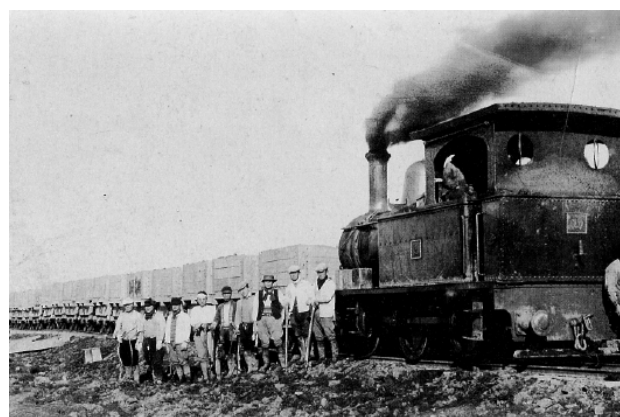


写真-3 20t 蒸気機関車による土砂運搬作業



写真-4 統内新水路を下流側の茂岩から望む

c) 十勝川中流部川づくり³⁾（平成中期～現在）

平成9年（1997年）の河川法改正により、河川管理の目的として、「治水」・「利水」に加え、「河川環境」（水質、景観、生態系等）の整備と保全が位置づけられた。また、河川整備に関する計画は住民の意見を反映して定めていくこととなり、このような背景のもと、十勝川中流部は地域づくりを通じて、地域住民やNPO、関連

自治体等と連携・協働しながらより良い川づくりを進めている。

十勝川中流部は、帯広市、音更町、幕別町の3市町にまたがり、人口や資産が集中しており、急勾配で流下する音更川や札内川が相次いで合流し洪水氾濫により甚大な被害が生じるおそれのある地域である。一方、自然環境は、ケシヨウヤナギを中心とした河畔林や特有の生物の生息環境となる礫河原、ハクチョウ・カモ等の渡り鳥の中継地など多様な河川環境・景観を有している。また、その河川空間は、カヌー、野鳥観察会、釣り、散策、サイクリング、スポーツなど地域住民が親しむ場として利用が盛んである。

平成22年（2010年）には「十勝川水系河川整備計画」が定められ、治水安全度向上を図るとともに良好な河川環境・景観等を守るため、地域住民と河川管理者のほか有識者や学識経験者などが一体となって検討する十勝川中流部川づくりワークショップが立ち上がり、河川整備をより具体的に示す川づくり（案）が作成された。

平成24年度（2012年）には、川づくり（案）に沿い確実に実施していることを確認するため、ワークショップから地域住民を中心とする「十勝川中流部市民協働会議」が設立され、川づくり案を「計画」とし、河川管理者が「実施」し、十勝川中流部市民協働会議が主体的に「確認」とともに、必要に応じて十勝川中流部市民協働会議と河川管理者が「改善」方針を検討し、「計画修正」へと繋げるPDCA型河川管理として地域と連携した河川整備・管理を進めている。（図-3）



図-3 PDCA型河川管理のイメージ

また、次世代の技術者育成に繋げるため、帯広農業高校と帯広工業高校において、十勝川の成り立ちや、川のはん濫から人命・財産を守ることや河畔林の役割をはじめ、建設会社・コンサルタント会社・行政の仕事内容などの幅広い講義を行い、課外授業においては草地復元予定箇所デザイン作成を高校生自ら行ってもらい、これを十勝川中流部市民協働会議と河川管理者とで検証し、実施に繋げるなど高校生との連携を図っている。

3. 地域産業の発展

今日の十勝川流域の第1次産業については、農業は十勝平野における畑作・酪農を中心とした農業地帯が形成され、流域の基幹産業であり、日本有数の食料供給基地となっている。

農業生産額の全道に占める割合は26%（道内1位）、食料自給率が約1,340%となっている。

水産業については、寒暖2海流が接した好漁場の道東太平洋に臨み、サケ・スケトウダラ・シシャモ・タコ類・ツブ類・毛ガニ等を主体とした沿岸・沖合漁業が行われている。また、千代田堰堤ではサケの捕獲も行われており、季節の風物詩として多くの観光客が訪れている。

シシャモは十勝・釧路管内の漁獲量が全道の漁獲量の大半を占め、主要な産地となっている。

さらに、流域では豊富な森林資源を活用し、カラマツを代表樹種とした林業が営まれている。

また、第2次産業については農業、林業等の第1次産業を背景とした食品製造、木材・木製品製造などの資源型工業が行われている。

第3次産業は、帯広圏を中心に卸売業・小売業、サービス業などの産業が充実している。大規模小売店舗については、近年、地場企業による新規出店が相次いでおり、年々増加傾向にある。

その他に十勝川の源流部は、大雪山国立公園に指定され、亜寒帯特有の針広混交林の森林景観が広がっている。支流の利別川は長流枝内丘陵に、札内川は日高山脈襟裳国立公園に、音更川は然別火山群にそれぞれ水源を有している。

支流である然別川の上流では「然別湖のオショロコマ生息地」が北海道指定の天然記念物となっている。

中流部には日本でも珍しいモール（植物性）温泉である十勝川温泉があり、毎年、多くの観光客が訪れている。

下流部では、十勝川の高水敷に生育する推定樹齢150年のハルニレが豊頃町指定文化財となっている。また、河口部で見られる十勝川を覆い尽くす氷が流れ出し、大津海岸に打ち上げられた氷の塊が太陽の光を受けて輝く自然現象「ジュエリーアイス」は新たな観光資源となっている。（写真-6）

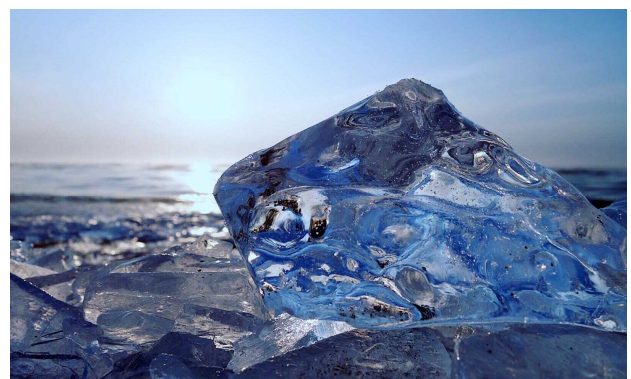


写真-6 ジュエリーアイス

4. 十勝川治水100年記念事業

(1) 概要

十勝川の治水事業が始まって100年という節目の年を迎えるにあたり、先人達の遺業を讃え、改めて流域の発展の基礎となった十勝川の治水の歴史を振り返り、治水事業の担った役割等を再認識するとともに、十勝川流域のさらなる発展と防災意識の向上にむけて、様々な主体が連携し各種取組を実施することを目的としている。

(2) 実行委員会の設立

十勝の歴史を紐解くと、その開拓の苦難は民間の力によって切り開かれてきた。

最初の入植者である依田勉三率いる晩成社はもちろんのこと、明治32年（1899年）に帯広に移住した高倉安二郎は雑貨店を開業し、牧場経営や肥料販売事業を営み、十勝国産牛馬組合や帯広農産商組合、帯広信用組合（後の帯広信用金庫）を設立、明治43年（1910年）に帯広に移住した現在の十勝毎日新聞社の創業者である林豊洲は、十勝川温泉の開発や文化事業の主催、スポーツ振興などで地域振興に貢献した。特に北海道で初めての花火大会を主催し、第二次世界大戦を契機に十数年ほど途切れたものの、現在も十勝川河川敷にて勝毎花火大会として続いており、毎年多くの人々が十勝川に集い楽しんでいる。

このように十勝地方の発展は、治水事業などの公共事業を発展の基礎としつつ、常に民間の力があって栄えたものである。

このことを鑑みて、十勝川治水100年の記念事業を行うにあたり、河川管理者である十勝総合振興局や流域17市町村からなる十勝川治水促進期成会の他、産業、金融業、教育機関、農水産業、観光業、河川協力団体など多方面の方々にご協力を賜り、総勢16名により、十勝川治水100年記念事業実行委員会を組織し、活発な意見交換を行っている。

(3) ロゴマーク

十勝川の治水事業開始から100年を迎えたことを広く広報し、記念事業への機運を醸成するため、ロゴマークを3案作成し、十勝川治水100年記念事業実行委員会において、投票で決定した。（図-4）

このロゴマークは「100」の数字の中に、日高山脈～十勝川～海へと流れ着くイメージと、農漁業を表現したものである。

(4) 主な取組案

次のとおり十勝川治水100年記念事業を令和4年から令和5年にかけて実施する予定である。

a) 記念碑除幕式の開催

先人の偉業を振り返るとともに、これからの流域のさらなる発展を願い、この想いを広く末



図-4 十勝川治水100年記念 ロゴマーク

永く人々に伝えるために記念碑を建立し、除幕式を開催する。

b) 記念式典の開催

各方面の関係者らをお招きし、祝いの式典を開催する。

c) 記念シンポジウムの開催

十勝川の治水の歴史や今後の流域の発展について、知識や関心を高めてもらえるよう一般参加のシンポジウムを開催する。

d) 十勝川インフォメーションセンターの再オープン

よりよく治水事業に親しんでもらえるように既存施設の改修を行い、流域住民の方々にご利用してもらえる施設にする。

e) 続・十勝川治水史（仮称）の発刊

過去の事業や災害の記録などの先人の偉業が散逸しないようにとりまとめ後世に伝えるため、昭和48年に発刊済みの「十勝川治水史」に続くものとして発刊する。完成後はホームページで公開を予定しており、概要を記載した小冊子を記念シンポジウムにて配布予定である。

f) 写真展示リレーの実施

十勝川流域の思い出をたどる写真の展示会を十勝管内の市町村にて計画している。

g) トークリレーの実施

十勝毎日新聞社にご協力いただき、実行委員会メンバー等による新聞紙面上でのトークリレーを実施する。

h) パネル展の実施

過去の事業を紹介するパネル展を帯広開発建設

部庁舎（帯広第2地方合同庁舎）と十勝総合振興局庁舎にて計画し、一部実施している。（写真一7）

この他にも記念事業ポスターやのぼり、懸垂幕の掲示や、職員個々の名刺やメールなどにロゴマークを利用し、より多くの人々の耳目を集め、十勝川治水100年記念事業への関心が高まり機運が醸成できるよう努めている。

また、記念事業の多くは、これから開催される実行委員会において実施が決定される。

5. まとめ

十勝川治水100年記念事業実行委員会は、多方面の方々にご協力いただき開催しているが、人数が多くたくさんの方の御意見をいただけるメリットがある反面、関係者との調整に時間を要したり、帯広開発建設部による事務局だけでは配慮が不足する可能性が考えられた。

これらを解消する一助とするため、実行委員会メンバーの中から、参加にご同意いただける数名により、十勝川治水100年記念事業の幹事会を組織し、記念事業案の実施内容を検討した上で、実行委員会に提示するスキームとした。

また、多方面の方々にご参加いただいているため、通常であればお話しする機会のない分野の方々との接点を持つことができ、十勝川治水100年記念事業を終えた後の河川環境活動や、河川空間の有効活用などの今後の事業でもご相談できる環境が整いつつあり、これはご参加いただいている関係各位にも同様のメリットが生じるものと思われる。

最後に、十勝川治水100年記念事業の実施と今後の治水事業の推進に向けて、より一層の精進を誓いまとめとする。



写真一7 パネル展（帯広開発建設部庁舎（合同庁舎））

参考文献

- 1) 十勝川治水史 昭和48年刊行
- 2) 十勝平野を潤す、水の大樹 十勝川 帯広河川事務所20年誌 平成8年刊行
- 3) 天羽 淳、木村 康裕、石郷岡 淳
十勝川中流部における地域と連携した川づくりに
ついて 一豊かな自然環境の保全を目指して－
北海道開発局技術研究発表会2013